

機関番号：34414

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520668

研究課題名（和文） 日向・畿内両地域間における埴輪工人・工人集団の移動からみた埴輪生産組織の研究

研究課題名（英文） A Study of the Production System of *Haniwa* from the viewpoint of the Movement of *Haniwa* Craftsmen between *Hyuga* and *Kinki* District

研究代表者

犬木 努 (INUKI TSUTOMU)

大阪大谷大学・文学部・教授

研究者番号：40270417

研究成果の概要（和文）：

宮崎県西都原古墳群に所在する女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳・西都原169号墳・170号墳・171号墳から出土した埴輪は、東京国立博物館、宮内庁書陵部、京都大学総合博物館、宮崎県立西都原考古博物館に所蔵されているが、そのほぼ全てについて、実測図作成・拓本採取・写真撮影・計測・観察を実施した。このような調査・研究を通じて、古墳時代中期中葉における西都原古墳群の埴輪生産に従事した埴輪生産集団の内部構造を、同工品レベルで解明することができた。

研究成果の概要（英文）：

In this study, I made a complete survey (photographing, drawing, measurement and observation) of *Haniwa* excavated from Saitobaru Burial Mounds, which is owned by Tokyo National Museum, Archives and Mausolea Department of Imperial Household Agency, Kyoto University Museum, and Saitobaru Archaeological Museum of Miyazaki Prefecture. On the basis of these investigations, I analyzed the production system of *Haniwa* and the organization of the *Haniwa* craftsmen in Saitobaru district in the middle of Kohun era.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：日本考古学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：考古学、古墳時代、埴輪生産、手工業生産、円筒埴輪、形象埴輪、同工品、西都原古墳群

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の埴輪研究においては、研究代表者の研究などを通じて、同一古墳に樹立された円筒埴輪・形象埴輪の詳細な分析（い

わゆる「埴輪同工品論」）に基づき、一古墳に供給するための「埴輪生産組織」あるいは「埴輪生産体制」に関する具体的な研究が盛んに行われるようになってきていた。しかし

ながら、その多くは一古墳を対象とした限定的分析にとどまり、一地域内における埴輪工人集団の活動の具体的軌跡についての研究はまだまだ遅れているといわざるを得ない状況であった（研究代表者による下総型埴輪についての研究〔犬木 1995「下総型埴輪基礎考」『埴輪研究会誌』第 1 号、犬木 2005「下総型埴輪再論」『埴輪研究会誌』第 9 号など〕や、西都原古墳群出土埴輪についての研究〔犬木編 2008『西都原 I』（大阪大谷大学博物館報告書第 54 冊）、犬木 2007「西都原の埴輪から見えてくるもの—カタチ・技術・工人・組織—」『巨大古墳の時代—九州南部の中期古墳—』など〕は例外的であった）。

また、上記のような同工品論の視点からの研究は、主に関東地方の後期古墳出土埴輪を対象として行われてきた経緯があり、関東地方以外で、また、前・中期古墳を対象とした研究成果は、数えるほどであった（連携研究者の廣瀬覚氏による研究〔廣瀬 2005「五色塚古墳と前期後葉の埴輪生産」『五色塚古墳・小壺古墳』〕や、研究代表者による研究〔〔犬木前掲文献〕など〕）。

研究代表者による下総型埴輪の研究成果〔犬木 1995（前掲）、犬木 2005（前掲）〕や、西都原古墳群出土埴輪の研究成果〔犬木 2007（前掲）〕を見れば、従来の埴輪編年論という「縦糸」に対して、埴輪同工品論という「横糸」を加えることによって、既存の埴輪研究とは比べものにならないほど、立体的かつ重層的な埴輪生産組織論を展開することが可能であることは明白であるが、同様な視点からの分析は、埴輪製作技術の「発信地」であるはずの近畿地方においても、上記の犬木・廣瀬の分析以外、ほとんど行われていない。畿内から各地方への埴輪生産技術の拡散について議論されること自体は多いが、その基点である畿内埴輪生産の工人・工人集団レベ

ルでの具体相については存外に不明な点が多い。

折しも、2008 年 3 月には、数年来、宮崎県教育委員会と大阪大谷大学が共同で実施してきた西都原 169 号墳・170 号墳の発掘調査報告書が刊行された〔犬木編 2008『西都原 I』〕。報告書刊行のための整理作業の過程で、上記両古墳のほか、宮崎県教育委員会で調査された西都原 171 号墳出土埴輪（宮崎県立西都原考古博物館所蔵）や、京都大学総合博物館所蔵の西都原 169 号墳・171 号墳出土埴輪、東京国立博物館所蔵の西都原 169 号墳・170 号墳出土埴輪、宮内庁書陵部所蔵の女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳出土の埴輪についても観察・実測作業を進め、西都原古墳群出土埴輪については、埴輪生産組織の全体像についての概括的見通しが既に得られている状況である。

## 2. 研究の目的

本研究においては、研究代表者が下総型埴輪研究などにおいて錬磨してきた「埴輪同工品論」の方法を基礎としつつ、また、2008 年 3 月に刊行された『西都原 I—169 号墳・170 号墳発掘調査報告書（遺構編）』において提示された西都原古墳群出土埴輪の調査成果に基づき、①西都原古墳群における埴輪生産集団の内部構造を工人レベル（同工品レベル）で解明すること、また、②西都原古墳群出土埴輪の製作に関与した埴輪工人の「故地」を畿内中枢の古墳の中に追究すること、を目的とする。

①については、研究代表者によるこれまでの調査・研究の成果を踏まえ、できるだけ多くの埴輪について、図化・撮影・拓本採取・計測・観察・分析試料採取を行うことを目的とする。

また②については、西都原古墳群と同時期

(古墳時代中期中葉)の、比較的埴輪の内容が判明している中小古墳出土埴輪の悉皆調査に着手する。具体的には、大阪府下では、古市古墳群の岡古墳・仲津山古墳・誉田御廟山古墳・狼塚古墳、百舌鳥古墳群の百舌鳥御廟山古墳などから出土した埴輪を分析する。西都原古墳群に並行する中期中葉という時期の古墳はもちろん、その前後の古墳についてもあわせて検討する。

3年間の研究を通じて、古墳時代中期中葉における畿内中枢地域—すなわち古市古墳群や百舌鳥古墳群における埴輪工人集団の内部構成や、工人間の関係を具体的に工人レベルで解明し、さらには埴輪工人集団の成立過程および埴輪工人集団どうしの関係や、埴輪工人集団の通時的変遷を明らかにすることを目的とする。また、最終的には、西都原から畿内中枢の地に「上番」し、また畿内中枢から西都原の地に「派遣」された(「帰郷」した)埴輪工人集団・埴輪工人の実態について、具体的に解明することを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究の眼目となるのは、古墳時代中期中葉という時期に、西都原から畿内中枢の地に「上番」し、畿内中枢から西都原の地に「派遣」された(「帰郷」した)埴輪工人集団の内部構造を手がかりとして、畿内における埴輪生産組織の構造を解明し、両地域の政治的関係を解明することである。そのためには、畿内における古墳時代中期中葉の古墳に樹立された埴輪の徹底的な分析が大前提である。いかなる工人集団論といえども、その分析の基礎をなすのは、一古墳の埴輪の分析からである。このような同工品識別作業が実現可能であり、埴輪研究ひいては古墳時代手工業製品の生産体制の解明に大きく寄与するという事は、研究代表者および連携研究

者のこれまでの研究成果によって明示されている。このような「埴輪工人の識別作業」が、埴輪研究における既存の様々なアプローチを補完し、より具体的な「埴輪工人」像、ひいては「埴輪工人集団」像を結ばせる有力な武器になることは明白である。もっとも、ここ数年、研究代表者・連携研究者のような同工品識別に立脚した研究視点の重要性が徐々に周知されつつある反面、別々の古墳や地域から出土した埴輪生産体制の類似・相違を検討する場合、いまなお主観的・直感的な比較検討が主流を占めていることも確かである。

研究代表者・連携研究者が遂行してきた「同工品の識別作業」は出土埴輪全点を詳細に検討したうえで、各工人の癖や特徴を見出していく地道な作業であり、その遂行には膨大な労力を必要とするが、その研究手法としての可能性はきわめて大きく、今後、埴輪研究の主流となると思われる。本研究では、研究代表者のこれまでの研究成果に基づき、誰もが納得する客観的な同工品識別作業を遂行するとともに、このような基礎研究の上に、最終的には、古市古墳群および百舌鳥古墳群における埴輪生産に関与した埴輪工人集団の内部構造および集団間関係を、埴輪工人レベルですべて解明できると考えている。西都原古墳群に「派遣」された埴輪工人たちが「故地」である畿内において製作した埴輪についても、その過程で自ずから明らかになるものと考えている。本研究の遂行を通じて、現在の埴輪研究のパースペクティブをより具体的かつ鮮明なものとし、停滞気味にある畿内の埴輪生産体制論に新たな地平を切り拓く端緒としたいと考えている。

### 4. 研究成果

3年間にわたる本研究において、各機関に

所蔵されている西都原古墳群出土埴輪についての調査・研究を行うことができた。

具体的には、①宮崎県立西都原考古博物館に所蔵されている西都原 171 号墳出土の円筒埴輪・壺形埴輪・形象埴輪（宮崎県教育委員会調査）、②同博物館に所蔵されている西都原古墳群出土の円筒埴輪（出土古墳不詳）、③京都大学総合博物館に所蔵されている西都原 169 号墳・171 号墳出土の円筒埴輪・形象埴輪（大正調査出土）、④宮内庁書陵部に所蔵されている女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳出土の円筒埴輪・形象埴輪、を対象として、実測図作成、計測、拓本採取、写真撮影を行ったほか、可能な範囲で分析試料を採取し、蛍光 X 線法による胎土分析を実施した。上記機関に所蔵されているほぼ全ての埴輪資料について、調査・研究を終了することができた。

またその過程で、平成調査出土埴輪と大正調査出土埴輪の間での接合関係も確認され、一部不明瞭であった大正調査出土埴輪の帰属古墳を明らかにすることができた。

東京国立博物館に所蔵されている「西都原古墳群」出土埴輪については、子持家形埴輪・船形埴輪が西都原 170 号墳出土、その他の器財埴輪が西都原 169 号墳出土であることが明らかになった。

また、京都大学総合博物館に所蔵されている西都原 171 号墳出土埴輪については、楕形埴輪が西都原 169 号墳出土、その他の器財埴輪が西都原 171 号墳出土であることが明らかになった。

さらに、宮崎県立西都原考古博物館に所蔵されている「西都原古墳群」出土埴輪については、平成調査出土埴輪との接合関係は確認できなかったが、埴輪の特徴から、西都原 169 号墳ないし 171 号墳から出土した可能性が高いことが明らかになった。

上記のような調査・研究および、出土古墳不明資料の帰属確定により、西都原古墳群出土埴輪—すなわち、女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳、西都原 169・170・171 号墳から出土した埴輪のほぼ全てについて、製作工人を識別し、その埴輪生産組織の全容を解明することができた。

結論として、西都原古墳群における上記 5 古墳の埴輪は、「女狭穂塚古墳・169 号墳・171 号墳」（女狭穂塚系列）と「男狭穂塚古墳・170 号墳」（男狭穂塚系列）という二系列に大別することができた。「男狭穂塚系列」を構成する 2 古墳については資料数が限定されているため工人構成の全体像は明らかにできていないが、「女狭穂塚系列」を構成する 3 古墳についてはそれぞれ共通の埴輪工人が見出されており、その一方で、古墳ごとに埴輪工人のメンバー構成が変化していること、言い換えれば、その都度、埴輪工人組織の編成替えが行われている点が特筆される。また、さらに、同じ工人の製作品でありながら、古墳の造営順に少しずつ手法が変化しており、しかも、その変化の方向性は、畿内における中期中葉における円筒埴輪の形態変化の方向性にほぼ「連動的」「同調的」であることが明らかになった。

上記のような諸事実は、西都原から畿内中枢部に「上番」した「集団」が、畿内中枢部の埴輪工人とともに日向の地に「帰郷」し、畿内中枢部の埴輪工人の指導の下、西都原における埴輪生産に従事していた可能性を示すものである。しかも、西都原から畿内中枢部への「上番」は、一回限りではなく、複数回に及んでいた可能性を示唆している。

西都原古墳群における埴輪樹立古墳は、「女狭穂塚系列」においても、「男狭穂塚系列」においても、それぞれ複数時期にわたって造営されており、西都原の地における埴輪

生産が、首長墓造営のたびごとに「単発的」に行われていたことを具体的に示す証左として重要である。また、西都原古墳群におけるこのような分析結果は、畿内における埴輪生産システムを考える上でも、非常に重要な情報を提供してくれている。

一方、西都原古墳群と対比し得る畿内中枢部の埴輪については、大阪府堺市百舌鳥御廟山古墳出土品（宮内庁書陵部所蔵）や、西墓山古墳（大阪府藤井寺市教育委員会所蔵）、狼塚古墳出土品（同前）などの分析も行っている。西都原古墳群出土埴輪と同時期と考えられる、畿内中枢部における古墳時代中期中葉の埴輪を検討していくと、両者の酷似点に加えて相違点も明確になってきている。

西都原古墳群出土埴輪の総合的・悉皆的研究については一定の目途がついたので、今後は、畿内中枢部の大王墓出土埴輪について、より詳細な調査・研究を行い、両者の比較検討作業をさらに継続する必要がある。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

①犬木努・近藤麻美・金行美智子、西都原古墳群出土埴輪の補足調査—宮崎神宮徴古館旧蔵埴輪を中心として—、宮崎県立西都原考古博物館研究紀要、査読無、第7号、2011年、45～57頁

〔学会発表〕（計5件）

①廣瀬覚、近畿における前期古墳の埴輪、中国四国前方後円墳研究会第13回研究会、2010年12月4日、松山市考古館

②廣瀬覚、前期古墳の埴輪、考古学研究会関西例会160回シンポジウム、2009年10月25日、大阪歴史博物館

③廣瀬覚、埴輪の成立過程をめぐる諸問題—

特殊器台・特殊壺・加飾壺、2009年度大阪歴史学会大会（考古部会）、2009年6月28日、関西大学千里山キャンパス

④犬木努、同工品識別による埴輪生産構造論—中・後期の事例から—、平成20年度大阪大谷大学文化財学科公開講座『古墳出土品がうつし出す工房の風景』、2008年12月13日、大阪大谷大学博物館

⑤廣瀬覚、前・中期古墳の埴輪生産とその特質—野焼段階を中心に—、平成20年度大阪大谷大学文化財学科公開講座『古墳出土品がうつし出す工房の風景』、2008年12月13日、大阪大谷大学博物館

〔図書〕（計2件）

①犬木努編著、大阪大谷大学博物館、西都原Ⅱ—169号墳・170号墳発掘調査報告（遺物編）—、大阪大谷大学博物館報告書第56冊、1～147頁、2010年

②廣瀬覚、大阪市立大学日本史研究室、メスリ山古墳出土埴輪の再検討、メスリ山古墳の研究、大阪市立大学考古学研究報告第3冊、90～102頁、2008年

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

犬木 努 (INUKI TSUTOMU)  
大阪大谷大学・文学部・教授  
研究者番号：40270417

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

廣瀬 覚 (HIROSE SATORU)  
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・研究員  
研究者番号：30443576